

# 文化高知 7

## 女性時代の到来!!

中村 雄一

女性が社会を変えようとしている。いや女性があらたな時代を創りつつあると言ってもいい。その現象は、職場に、遊びに、子育てに、ショッピングに、ありとあらゆる生活に現れている。これは、どんなに否定しようとも社会の「うねり」、時代の勢いなのだ。

それは二つの観点からうかがえる。ひとつは、社会の方向が女性化に向かっている、という事実と、今ひとつは、今までに全くなかったあたらしいタイプの価値観に目ざめはじめた女性たちが現れた、ことである。

その特徴は、男性諸兄には、ほとんどといってわからない、女性特有の本性から生まれてくる「情緒、情感、感覚」といった感性によるものである。原理、原則、合理的、機能的をもつと得意とする男性諸兄には、全く理解できないような別世界の特性なのである。いいかえれば、女性特有の女性の情念の時代が変わろうとしていることである。

女性の情念、それは相手のほんの指先の少しのいたみまでもわかってあげられる、また、「ものすごい不幸」までも相手の立場で一緒にその不幸を背負ってあげられる、ものである。そし

て、ものの本質には、直接無関係なこともでも大騒ぎができるのも女性の情念と云うものであるように思われる。この女性の時代には、心配り、やさしさが先行すると言っているようにだ。モノよりもココロを大切に、モノに



「落葉松」大野 長一

もココロを感じようとする女性のやさしさを、それを期待し得ようとするさまざまな女性の行動。その期待をうらぎするような、無神経で無配慮な対応は、女性のココロを即座に傷つけ、女性のココロはメチャメチャに傷ついてしまふものだ。モノではココロの豊かさまで

は満足させ得ない。モノは満足の一手段なのだ……ここに気付き、女性特有の情念とからまって、モノを単に買うことにつまらなさを感じ、モノには買うだけの理由を求め、モノを売るにも、私たちが納得させ得る理由を付けてよ、と女性たちは欲求しはじめている。効率を追及した、機能優先の冷たい売場から女性たちは逃げ始めた。もつと快い、もつと女性のココロを大切にしてくれる、そんな場所に移動しはじめていようだ。

男性が作り、男性が与えてくれたモノを思いつくままに手に入れた時代、それが六十年代と七十年代の女性であったように思われる。しかし今、女性時代の「うねり」を創造しつつある八十年代の女性は、「モノ持ち、ヒマ持ち、知識持ち」なのである。確実に彼女たちの生きざまに意識革命が起こり、モノを消費するのが消費者ならば、今の私たちは消費者じゃない。モノは揃っている、今さら欲しいものもない、モノじゃ充足できない生活があるということに目覚めたんだと言っているようである。自分なりの生活を選び創造し、自己投資を惜しまなくなった女性たち、生活創造者とも言えるあなたたちの「うねり」が、私に波動となつて伝わってくる。そう、あなたたちの女性の感性が創り出す時代の到来なのである。

(株)サニーマート社長

# 野外文化活動のすすめ

森田 勇造

この十年来、年に二度帰高し、高知城から市内を観る。私が初めて上ったのは、昭和三十三年三月に宿毛から上京する途中であった。ずいぶん街が大きくなり、ビルが多くなった。しかし、高知にはまだ緑が多く、東京とは比べようもない自然の恵みを感じる。

太平洋を抱きこんだ高知県は、海と山の大自然に恵まれているが、地理的には孤立していたので、産業開発はなかなかすすまなかった。そのせいで、今も自然の恵みが十分にある。東京から僅か一時間余で飛来するたびに、ふるさとのさわやかな緑の風に、体内が清められるようなこちよさをあじわう。これこそ南国土佐の天然資源である。

この頃、青少年の健全育成が叫ばれ、教育改革の波が大きくなるとなっている。文明化によって日本中が画一化され、間接的知識の豊かな人が多くなっている。物の豊かな高等文明社会で人間らしく生きるためには、自然とのかかわりの重要性が再認識されかけている。これからの地域社会の発展は、単

なる観光や工業開発ではなく、自然と人のかかわり方などによる付加価値の開発による大きな要因になると思われる。その一つが、社会の後継者づくりとして、青少年の心身を培い、生活文化の伝承を目的とする「野外文化活動」である。

ここにいう「野外」とは、屋内とか屋外をもって表現する文明的な概念ではなく、人間が自然と共に生きる野生的な世界を意味する言葉として使用するものである。

また、野外文化といった場合の「文化」とは、社会人に必要な基本的な行動と心理状態（知識、態度、価値観）のことであり、文化人類学的な表現をするならば、社会の成員に共通した行動や生活様式を指しているのである。

## 生き生きとした街づくり

岩目 一郎

街を活性化するためには、まず若いこと（柔軟な思考と行動力）、そしてチームで物事にあたること（組織力、活発なコミュニケーション）が不可欠です。この二つさえあればいろいろな形の活気ある街づくりが可能になると思います。そして人間どうしのふれあい情報を生み、新しい人間関係が出来上がってゆきます。これからは個人プレーでなく、チームワークによる企画と運営がますます必要になってきます。例えば、一つの歌を一人で歌うより三人、十人、百人と人数の多い方が歌い方に幅ができ、音の厚みも増し、アレンジも楽しくなります。また、歌い方を工夫することにより新しい感性が開発されてゆきます。そして、そこに独自のオリジナリティが生まれてくる訳で、街の活性化にとっても、こういったオリジナリティを生む協同の創作がことに必要です。

人の動き、商品開発、行事企画などを考えてゆけば、街は物を買うだけの場所ではないことが分ります。ある人は街に遊びに来る、ある人は情報を集めに、ある人は人と会うた

鍛練などの基層文化は、自然環境に順応して社会生活を営むための基本である。地域性が強く、親から子、子から孫へと伝承される。これらを共有しないと、意思伝達が十分でなく、社会の一員になり難い。

いかなる社会にも、基層文化を伝承する野外でのいろいろな異年齢集団による身体活動があるものだが、野外文化活動といった場合、野外の文化活動とするのではなく、野外文化の習得活動を意味するのである。「自然と共に生きる心身を培い、社会生活の基本的な行動や様式を習得するための身体活動」

野外文化活動をこのように定義するのだが、わかりやすくいえば、自然を理解し、自然を利用し、自然と共に生きる心身を培い、社会にふさわしい常識を身につけるための身体活動のことである。

例えば、祭礼行事としての綱引き、力比べ、相撲、みこしかつぎ、盆踊り、どんど焼き、たこあげなど、竹馬、石けり、いろいろな合戦、遠泳、その他山菜採り、潮干狩りなどがある。

このような古来からの野外文化活動は、いかに文明が進歩しようと、人間の本質が変わらない限り、社会生活を営む構成員の基層文化を育むためには、通過儀礼的に必要なこと

## アンチいごつそう

多田 信子

カルチャーショックという言葉が流行語のように使われだして数年経つ。ショックという程ではないにしても、大都市と地方都市の文化の間にも、どうにも越え難い違いがあるように思われる。東京から移り住んで、二十余年になるが、人口の差と文化の面で、どれ程大きな違いを生むか、に改めて感心させられる。市という単位でみても、三十万の都市と九十万の都市を比較すると、

あらゆる面で、三倍ではなくて、二乗に近い差が生じるかのように思われる。まして一千万となると、二乗、三乗、考えられないような仕事や催しが企画され、成功を収める。しばらく東京に滞在して帰るたびに、今や東京は化物だ、と吐息と共に思う



「川開き」安芸真奈  
フルハウス・パトロールから

だと思われる。人口過密の都会ではこのような活動は困難なので、まだ自然の恵みの豊かな高知県が、他県に先がけて、野外文化活動の行政レベルでのモデル地区となることが望まれる。

野外文化活動は、進学や就職のためになすものではなく、幼少時代基礎体力をつくり、情緒やふるさとを育み、情操を培うものである。そのため、青少年時代の体験者にとっては、その機会に恵まれたところが第二のふるさととなる。もし、高知県が、日本の野外文化活動の中心地となることのできるならば、二十世紀には多くの人々が、高知を第二のふるさととして訪れるようになるだろう。(社)青少年交流協合理事長



子ども会キャンプ村 撮影 青少年課

のである。一人娘は美術を志し、その方面をおさめて自立すると宣言し、この春東京へ去ってしまった。本気で学ぶつもりなら仕方あるまい。美術館や画廊は毎日通っても廻り切れない程だし、学ぶ機会も刺戟も満ちている。要する努力も大抵ではないだろうが、いくばくかの仕送りと、はげまし以外にしてやれることがない。美術だけでなく、身につけて欲しいものがもう一つある。それは周囲の人々が何を欲しているか、一対一なら相手がどうしてもらいたがっているかを察する心である。一種のサービスピ精神だと思っただけでも、いごつそうの対極に位置する気ばたらきかもしれない。会社に勤めれば、上司が何を欲しているか、商売ならば、お客が求めているものは何か、家庭の中では、家族がどうしてもらいたがっているか、周囲のニーズを見極め、それに添おうとする心、これは大きな都市での生活で磨かれるように思われる。それだけで気のきかない使用人、つっけんどんな店員、酒席の無理強いが減るのではないかつれ合いが何を欲し、何をいやがっているか、の心くばりをするだけで、つとに名高い高知の離婚率が、少しは低下するのではないか、と思うのは、少し短絡しすぎだろうか。(主婦)

# 黒潮方言圏の高知

柴田 武

方言は一般に隣り合っているように一番よく似ている。たまたま二つの方言間に大きな方言境界線があれば別だが、そうでない限り、地理的に近いほど類似していて、遠くなればなるほど違いが大きくなる。これはごく自然なこと、当然のことである。

だから、日本を大きく東と西、あるいは北と南に分けるならば、高知方言はいつも後者に属する。例えば、「炊きたての御飯から出る蒸気」を大阪以东（以北）ではユゲとかイキと言ひ、兵庫以西（以南）ではホケと言ひ。高知県もホケの地域である。

また、日本を北海道・東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州・奄美沖繩に分けるならば、高知方言はもちろん四国方言に属する。「かかと」のことをキリブサ・キリビシヤ・キリクサなどと言ひのは全国で四国だけで、しかも、四国四県に伸よく分布する。

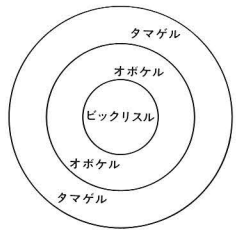
さらに、九州の、特に大分県、また近畿地方の和歌山県方言と高知方言が共通であることがある。「口

をクテイ (kutei)、「作る」をトウクル (tukuru)と発音するのは、全国で高知県と大分県だけである。「梅雨(時期)」をナガセと言ひのは、九州全域と高知を含む四国のほぼ全体と和歌山県の西側海岸である。高知県と大分県も、高知県と和歌山県もともに海をへだててはいるが、昔の交通(コミュニケーション)は陸路よりも海路だったことを考えれば、両者はやはり隣り合う地域と見るこ

とができる。方言は、行政区画などにお構いなく分布するものにはあるが、全国で高知県だけに、しかも高知県内にはくまなく分布している例もないことはない。「あさつてのあさつて(明々明後日)」のことは、何とも言わない人が多いが、もし言うとしたら、高知果はサシアサツテである。これこそ最も高知的な「高知方言」である。

「あざ」のウミジルシ、「おつり」のウワコも同じ例である。ただし、ウワコは、高知県内でも海岸に近い地域に限られているようだ。さて、高知方言が地理的にとび離れたところと一致していることがあ

る。一つは、東北・関東(中部)と一致する場合である。「急にうしろから大きな声をかけられてびっくりする」ことをタマゲルと言ひのは、一方は、岩手県以南の東北地方と千葉・埼玉県に至る関東地方と新潟県であり、そして一方は、中四国の西半分(このなかに高知県西部が入る)である。これは、もともと近畿地方の方言であるビックリスルよりも、また、山形県海岸部・能登半島先端部と徳島・香川県とに分かれて分布するオボケルよりも古い日本語らしい。なお、九州はタマゲルに似たタマゲルである。「平家物語」などにはタマゲルとあるから、タマゲルから一方でタマゲルへ、一方でタマゲルへ変化したのかもしれない。「びっくりする」にはこの他の方言もいくつかあるけれども、主な、以上三つ(タマゲルはタマゲルと合わせて同じ類とする)の方言の分布は、京都を中心に第一図のような同心円を描いている。



第1図「びっくりする」の方言分布

昔から、古語は中央から遠い辺境に残ると言われているが、これはその一例である。すなわち、柳田国男『蝸牛考』で有名な方言圏論で説明できる例である。ここでは、高知県だけがとび離れた地域と一致しているわけではないが、高知県の西部が九州などと日本の古いことばを残しているわけである。

さて、高知県が遠く離れた地域と一致する第二の場合には、高知が九州南部(奄美沖繩)、紀伊半島先端部、志摩半島、千葉県房総半島各地のすべて、あるいは一部とつながる場合である。「夕立」をサダチと言ひのは、鹿児島・宮崎・熊本・長崎の九州各県と四国全域と志摩半島である。「井戸」をインド (indo) のように鼻にひびかせて発音するのは、高知・徳島・淡路島南部と紀伊半島、そして遠く福島県会津・新潟県北部・宮城県である。これは、古い発音が太平洋沿岸沿いに残っている例である。

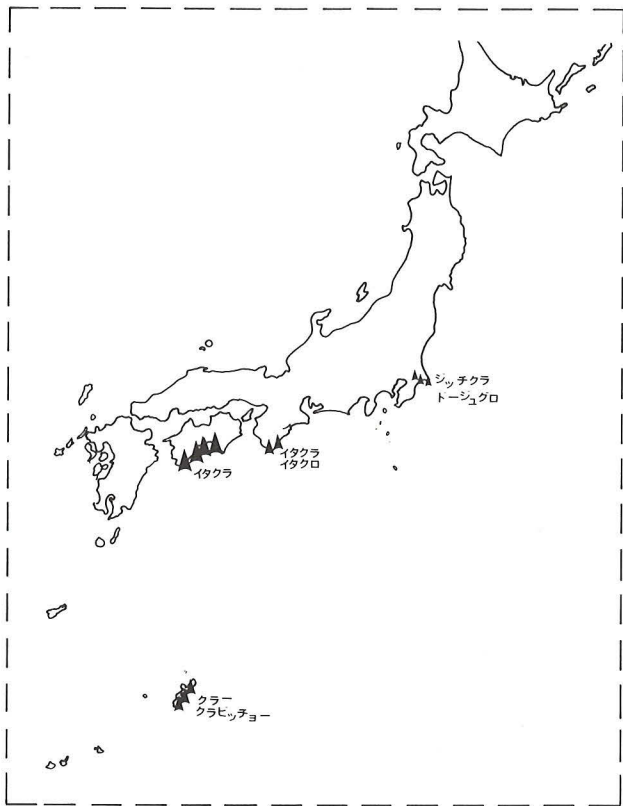
また、「すずめ」のことを高知県でイタクラと言ひが、同じイタクラ、少し変ったイタクラが紀伊半島南端・志摩半島に分布している。さらに、千葉県北東部にジツチクラ、ジャチグレー、ドージュグロのような、クラ・グレー・グロという要素を含んだことばが見つかる。一方、沖繩本島にも、クラ・クラビッチョ・ク

ラーヤマーなどという方言がある。

柳田国男によると、イタクラのイタは、東北地方のイタコ(巫女)、沖繩のユタ(巫女)とつながり、「読誦する」の意味であり、クラは、ツバクロ(つばめ)、チンチクロ(せきれい)のクロと同じで、これは「鳥」の意味である。したがって、イタクラは「読む鳥」「よくさえずる鳥」が語源だという。『総合日本民俗語彙』

イタクラ系の分布地域はちょうど黒潮に洗われる沿岸各地である。サダチも、「井戸」の発音もこれに準ずる分布と見ることが出来る。まだほかにもこれと似た分布の方言を見つけていることができるだろうと思う。これを仮に「黒潮方言圏」と名づければ、高知はその中核的な位置を占めていると言えよう。(以上の方言分布はすべて国立国語研究所『日本方言地図』による。)

(言語学者・東京在住)



第2図「すずめ」のイタクラ系方言

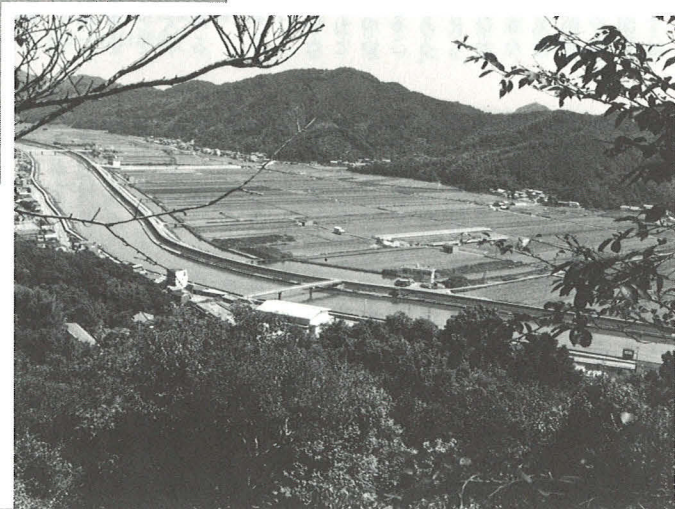
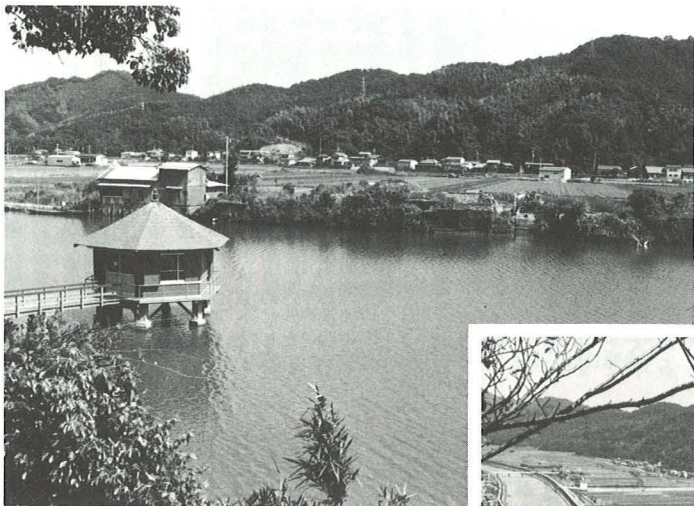
## 私の風景

浜口雄幸の生誕地「東孕」

吉門 司郎

撮影場所 高知市五台山東孕

撮影月日 昭和60年 8月18日



四季の作物を育み私たちに供給してくれて田園、餌を求めて飛来する野鳥の楽園である湖……心を和ませてくれるこの郷を大切にしたいと思います。

# ナウマン氏と高知

川 沢 啓 三

今から百年あまり前の明治十六年、若きドイツ人地質学者ナウマン氏(N. AUMANN)は、高知を訪れている。彼こそ日本の近代地質学の祖と仰がれ、五〇万年前の更新世とよばれる地質時代に生息していた旧象の名称に、氏の名前が献上されているのである。ミュンヘン大学を卒業後、若冠二十六才で来日し明治八年東京開成学校(東大の前身)の教授となったが、同十二年解職となり、一度帰国するが、地質調査所(現在の通産省工業技術院地質調査所)茨城県谷田部町)の技師長として再び活躍するようになった。その後を合わせて十年間、日本全国の地質調査の指導にあたり、フォッサ・マグナの発見などをはじめ、現在の地質学用語の中にも影響を残している。

明治新政府は、近代日本をつくるのにあたって、工業を重視したことはよく知られている通りであるが、その基礎をなすのは、地下資源の開発であった。このために全国の地質調査事業が、ナウマン氏らによって建議され設置をみたわけで、先述の地質調査所は、我が国の研究調査機関の中でも、最も古いものの一つといわれている。

さて、ナウマン氏の来高の件であるが、鎮国の扉をあけて間もない時期に、この僻遠の土佐の国を何故訪れたかはよくは解らない。多分、全国物産目録などから各地方の主な鉱産資源を知って、およその地質の分布を推定し、高知・佐川の特異性に気づいたのであるまいか。

ナウマン氏が外山氏に贈った詩—スケッチ—  
(外山玉汝氏蔵)

市領石の医師、大塚氏らの案内をうけたと。さらに西へ歩を進め、佐川まで足をのびし、かなりの日数、ここに滞在したらしいのである。当時佐川には、外山矯氏の経営する宿屋があり、宿屋の主人は、土地柄もあって、地質学にも大きな興味を持たれていたようである。

当時の日本の片田舎、世人は「異人は人の血を吸う」とか、とかくの世評の中にもかわらず、外山氏は進んで案内役をひきうけ、ナウマン氏はその人柄にうたれたのか、旅のつれづれに

土佐紙に毛筆でドイツ語の詩をしたため、氏に贈っている(スケッチ参照)。この話は、四十年ばかり前、私がまだ中学生の頃、恩師上村登先生よりうかがったことがあった。それから数年後、昭和二十九年高知市で、日本地質学会の四国・西日本支部合同の例会が開かれた折、来高された熊本大学の松本唯一先生が、佐川が、いかに日本の地質学の中で重要な位置を占めてきたかを、話された中で、このナウマン氏の詩のことをのべられ、その詩の内容までもふれられたのである。

このことを、後日澤村武雄先生にお話してあったところ、先生が、『四国山脈』(毎日新聞高知版)にこの詩のことを紹介されたのである。ところが、外山矯氏の孫にあたる方が、この記事を讀まれ、この詩のことを思い出されて、高知大学へ届けられ陽の目をみるようになった。

詩の内容は、大づかみにいって、緑の山々は、実は前世紀の生き物たちがすんでいた海にできたもので、今は日の光のもとにさらされて、人々がそこにすみついているが、誰がこの詩の結論を知ることができようか。のようなものである。一片の紙きれにすぎないように見えるかも知れないが、学問の歴史をひもとくとき、このようなものに、そうしたちがひ出会うものではないような気持ちがあがてならぬ。外山矯氏は、昭和二年になくなられていて、蔵書や岩石などの収集資料は、当時の県立図書館に寄贈された由で、戦災で今日では

何一つ残っていない。僅かに中生代白亜紀の化石名(学名)にリノトリゴニア・トヤマアイ(エハラ)にその名が残されており、江原真伍先生(旧制三高教授)との交流のあとがうかがえる。ナウマン氏以後も、佐川の地を訪れた外国人地質学者は、ディーネル、スタイマン、ブラウアーなどがあり、国内では、現在でも四国横断地質見学ツアーを組み、高知へくる学生・研究者も多い。

私は、大地そのものを素材とした地質学の立場からみて、天与の博物館ともいえる高知県、自然がよく残されている我が郷土の恵まれた自然条件をあげたが、その他海洋や内水面の水産生物、亜熱帯から暖帯にかけての各種動物、亜熱帯にも、きつと他県では類を見ない豊かなものをもっていると思う。良い産地は、立派なナチュラリストを生むという。このすばらしい自然環境を思い、ナウマン氏の来高の意味をあらわすとき、次代の感性豊かな人を育て、自然を大切にすることを守り育てる上からも、人口密度の高い高知市に公的な自然史博物館の建設を望みたい。人によつては、いまさらそんな博物館なんか、古いものを展示して何にならんと、思う方もあるのではなからうか。私は、自然の改造が著しく、また、テクノロジーの発達によって人間が自然から遊離してゆく現代だからこそ、いっそう必要と思うのである。自然を系統的に分類することから自然科学は出発した。この原点は、現代の複雑多岐にわたる高度技術社会においても、忘れてはならないことのように思う。

(県立佐川高校教諭)

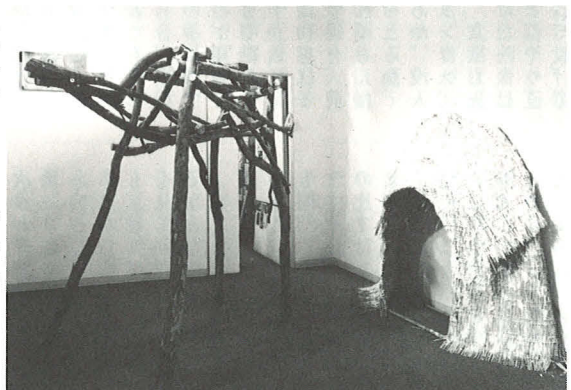
# 現代美術雑感

都 築 房 子

現代美術にかかわってきて、はや十五年が過ぎようとしている。私はこの十五年間の作家活動において、絶え間なく続けることを第一に考えてやってきました。家庭をもち、子供を育てる生活のなかに、作家活動を同時に進行させることは、たいへん厳しい状況であった。幼い子供の手を引き、おしめ、ミルクを持参し、作品搬入をしたこともあった。現代美術を続けることが、果たしてどれほどの意味をもつものだろうかと、自問自答の日々であった。こんなことをして何になるのか。しかし、とにかく続けようと思つてやってきました。それをいま振り返つてみて、日常を断ち切る行為としての現代美術が、実は一番自分をささえていたものであったことに気づかされる。自分の作品のスクラップブックをめくるとき、そこにある過去の作品は、確かな自分の歩みであり、現在に至る私の思考につなが

るものである。作家活動において、二十代の私はいつも時流を横目にみて走っているような状態であったように思う。いうなれば、流行のスタイルを追いかけた。流行にのりおくれもなく、姿以外別作品は良くも悪くもなく、私以外の別の人間がつくつてもおかしくない作品であったようだ。この時期が十年ほど続いた後、私でないといつてくれな作品を作らないとだめだと思つた。

三十代になったとき、開きなオツた姿勢でぶざまでも自分の本音で作品をつくらうと思つた。どのように酷評されようと、言いたいことを言おうと思つてつくつた作品は、思いがけず好評であった。このことが私の作家活動のうえでの分岐点となった。私が私であることに強い自信を感じた。私にとつて、ここ三年ほどたいへん忙しい状態が続いている。それは私の作品が時流と重なっているとも考えられるが、作品の独自性が評価されたものと自分に都合のよいように考えている。



「四つの個性」展出品作品  
同展は、歴史の浅い現代美術の領域において、着実に自分の世界を掘り下げながら、堅実な成果を築きつつある4人の作家の作品展。主催者は兵庫県立近代美術館の中島徳博、大阪の番画廊で8月5日～14日開催。

現在、年間十五回ほどの展覧会をこなしている状態だが、その経験から作品発表の場として、都会と地方の違いをしばしば感じることもある。種々雑多な人間の集まりである都会では、強い個性をもつことが大切で、有名無名にかかわらず作品に関する興味はストレートに示される。その例として、私が今年三月東京の原美術館での第五回ハラアニュアル展に出品することになった経過がある。昨春秋、突然美術館から資料請求の電話があった。まったく面識のな

い私はとまどいながら、私の存在を知り得た理由をたずねたところ、美術館は昨年夏のあるグループ展のカタログにある、私の作品写真を目にしたことが分かった。たった一枚の写真を見ただけで、その作家に賭ける美術館側の柔軟さを強く感じた。私はこの美術館の期待に応えようとして、持てる力を最大限に発揮しようとした。こうした機会をへて、作家というものは力をつけてゆくことができる。美術館が作家を育てようとする姿勢を示すことは、作家の側からみれば、たいへん幸せなことである。

一方地方では、なかなかそういうわけにはいかない。作家をとりあげるとき作家の経歴や、社会的地位など作品以外の要素が重要視される。またせまい人間関係があり、権威主義的で排他的な空気がつよい。排他的ということ

で言えば、日本では都会も地方も同じかもしれない。東京、大阪、京都と、展覧会のためによく出かけるが、それがせいまい地域で、なれあいや、権力指向がうまき、つまらない争いが作品や作家をだめにしているようだ。都会といえども、日本的な社会の枠組みの中では村と同じだと感じた。最先端であるはずの現代美術ですら、このありさまでは、他はおしてしるべしである。高知に住んでいることは、現代美術に関して不利なことが多いように思っていたが、最近では、これは逆なのではないかと思う。高知も地方であるが故の、わずらわしさはあるものの、都会でのそれほどではない。展覧会をして、会期がおわれば高知に帰り、人間関係も、まことにさっぱりと切りはなされる。作家はできるだけ、作品中心に認められたいものだと思う。かりにそれ以外の要素で、評価が高くなることもあつても、長続きしない。やはり、作家は自分の納得のいく作品をつくり続けることが、一番大切なことである。

(現代美術作家)

片岡ミヨシさん(南元町)

手こぎ一筋 (四)

文 西岡 寿美子  
写真 岡崎 禎 広

ノレンを吹いて風が通る。涼しい。梅雨期というのに、北のどこやらでは雪が降ったと報じていた。そのせいか空気が冷えて、秋口のようなサラサラとした風が吹く。

片岡さんの仕事場は、玄関脇の四畳半である。窓に向かって裁板が置かれ、アイロン、物差、針山、様々な色糸の詰まった糸箱。「そうですね、うんとええお日和です。こんな日は、ようしこが出来ます。柔らかなものは、雨の日はボタボタしてつけませんに」。のつけにこんなところから話が始まって、仕立に天気は関係ない、と思っていたわたしは目をパチクリしてしま

った。「それでは雨の日はどうなさいますの」と聞いたら、「暑うてもストープをつけて湿気とりながら縫うか、ツムギや綿ものを扱って天気待ちをしますから」という返事である。裁板の上には、解かれた反物が長々とねっぺている。一越のつけ下げで、地はさびた水色。遠山に木立という日本画風な模様部分の部分が、甘い浅黄のぼかしになっている。年輩の人のものが、モノがいいので一帯が華やぐ。片岡さんは、今それを裁とうとしているところである。

裾模様や留袖、つけ下げなどの上物は、大体染めの段階で模様あわせが出来ているので裁つ苦労はないが、総模様になると、「おおごと」である。模様を見ながら、取りあわせ、取りあわせ、

また取りあわせ、三丈三尺から四尺ある反物を、染めムラ、織りムラ等のキズはないか、あればそこを避けて、あもしろいか、これも裁とうか、と、日がな一日引つ張り暮らすこともあるという。編や格子のあわせ具合、模様の散らし具合、ほんの一寸の手加減で、粋にもなれば野暮にもなるのが和服である。背——殊に帯の上部と羽織から裾の部分、前身頃と袴はすっきり見せたい。模様を包んだ背を、脇を、前きつつ、生身を包んだ背を、脇を、前袂を、袴元を、翻る袖を、片岡さんは見ているのである。あちらをとるか、ここをとるか。こなか。あなか。没入して時間も覚えない。頭はカンカン、目はチガチガ。口は熱ばみ、食欲も失せる。訪客があれば結びかけた映像は忽ちこわれて、はじめからまたやり直しである。時には案につまんで投げ置いて頭を冷やし、改めて考えることもあるという。

話を聞くうち、片岡さんには、天性のデザイン感覚があるらしいのに気付いた。はじめて着物をつくる人には、まず身体を見せて下さい、と頼むのだけれど、来てもらっても物差を当てて寸法を取るわけではない。その人の背格好と雰囲気や頭を刻み、身幅や褶付けの具合を勘取るのである。この人にはこうして着せたいというイメージを得るのである。縫いものなかつた戦時中にも、片岡さんはモンペを

次々と頼まれたそうだが、これが実にカッコよく、しかも「穿いてノウがえ」と評判だったという。ネンネコも、あとからあとから注文がきたというのも、着物を固定の寸法でとらえず、人を見て創意し、工夫してゆく才能があるからだろう。

「人は縫うのが難しいといいますが、あたしは裁つのに一番難儀します。裁ちさえすれば三分の二まで仕上がりますが、まっこと、ホツとした比ではありません。その「縫い」がまた入念である。袖口、裾のフキなど、惚れれば美しいしごとぶりである。要所には力布もつける。一枚の袷に十二枚の力布をつけるというから、片岡さんの縫ったものはきまっています。狂わない。一枚の着物にかける日数は現在四日。月七枚程度。順待ちの反物は、常時二十反から三十反も積まれている。

ムコの家で着た。「ひつづめた髪の毛が痛うて」とほのかに笑う片岡さんが、色白く、ほっそりと面長だったという、十九歳のおほこな花嫁さんはさぞきれいだったことだろう。「里帰りはハイヤーに乗りました」ともいうから、文太郎さんの家格に合わせた婚礼は、当時ではなかなか豪華だったようである。

そして、嫌いだつた「お針」を、片岡さんが嫁家で習わされる羽目になつたのも皮肉なら、それを生涯の職とするに至つたのも、皮肉なことである。「実家で嫁が十分出来ちよらいで嫁入りしてから習わせてもらう恥ずかしさに」片岡さんは一通り習うと二ヵ月足らずでお針は切り上げた。「手は悪うなかつたのかも知れませんが、男があたしにアユの毛針をやらそうか、いうたこともありません。いいえ、縫うのは速うはございません。あたしは納得のいく仕上がりになるまで念を入れてや気が済まん方です。拾一枚五十銭。綿入れチャンチャン十五銭。習い終えると同時に賃しごとを手がけているのは、やはり、素質を

「主人という人がボンボンで、生涯世帯の苦労は知らん人でしたきに」働き盛り

「主人という人がボンボンで、生涯世帯の苦労は知らん人でしたきに」働き盛りの時は、お母さんはいっ寝るがじやろう、と子どもがいうくらい、夜昼裁板の前に座り詰めだつたものである。酒も飲まず、パチンコも知らず、遊ぶといえは映画を観るくらいだつた文太郎さんに、家計のことをこぼしても「オラは全部渡



自前の髪で、四・五日前から桃割れを結つてならし、当日夕刻には文金高島田に結び上げた。実家である吾川郡川内村から婚家の伊野町へ。その髪で、普段着の肩あげのついた着物に下駄をカラコロ。叔母さんと二人、夜道を歩いて橋を渡り、花ムコの家へ行った時の気分は忘れられない。こみ潮時をはかつた結婚式は夜あけて、裾模様は花

「主人という人がボンボンで、生涯世帯の苦労は知らん人でしたきに」働き盛りの時は、お母さんはいっ寝るがじやろう、と子どもがいうくらい、夜昼裁板の前に座り詰めだつたものである。酒も飲まず、パチンコも知らず、遊ぶといえは映画を観るくらいだつた文太郎さんに、家計のことをこぼしても「オラは全部渡

郷土関係研究論文

第一回(昭和五六年)

- 山崎博司(公務員・高知市)
- 吉村正策(公務員・高知市)
- 久保田秀亥(無職・高知市)
- 高知県のまちづくりを考える若い建築家集団(千頭輝雄他五名・高知市)
- 松村敏照(会社員・高知市)

第二回(昭和五七年)

- 山崎博司(公務員・高知市)
- 吉村正策(公務員・高知市)
- 久保田秀亥(無職・高知市)
- 高知県のまちづくりを考える若い建築家集団(千頭輝雄他五名・高知市)
- 松村敏照(会社員・高知市)

第三回(昭和五八年)

- 島田一夫(公務員・高知市)
- 山崎 勤(団体職員・香川県)
- 小松 稜(公務員・高知市)
- 山内一昭(教員・土佐山田町)
- 小論文の部
- 浜田亀生(団体職員・高知市)
- 橋田定男(無職・高知市)

- 松村敏照(会社員・高知市)
  - 浜渦曠恙子(主婦・高知市)
  - 宮崎淑恵(主婦・高知市)
  - 筒井操子(会社員・高知市)
- 第四回(昭和五九年)
- テーマ「高知県の特産品の振興策を考える」
- 一般論文の部
- 依光 裕(会社員・高知市)
  - 穂岐山駿二
  - 川村雅俊(団体職員・高知市)
  - 溝淵三保(主婦・高知市)
  - 中西正昭(公務員・高知市)
  - 小論文の部
  - 藤村茂夫(公務員・高知市)
  - 安並美晴(無職・高知市)
  - 大崎光雄(公務員・榑原町)
  - 浜田節夫(会社員・室戸市)
  - 筒井征子(主婦・高知市)
  - 古沢和子(主婦・高知市)
  - 吉川一一(無職・高知市)

- 『昭和五八年度高知県の民力』
- 一市町村別民力測定資料集
- 『みんなで知ろう高知県経済』
- 編集 高知相互銀行
- 発行 高知地域経済振興財団
- 以上の資料は財団に寄贈いただいてあります。その他の郷土関係資料とともに自由に閲覧できますのでご利用ください。なお、高知地域経済振興財団についての紹介は十ヶ十一ページに掲載しています。このコーナーでは、郷土に関する研究、論文、報告等を順次掲載します。ので、ご一報ください。

## 四十年を歌い続けて

フラワースングクラブ

「合唱音楽を通じての社会奉仕」を目的とし、昭和二十年に発足したアマチュア混声合唱団フラワースングクラブも今年で四十周年を迎えた。創立当時は二十三名であったメンバーも、今では百名余りとなり、各職種の厚い年齢層の人達で構成されている。



定期公演

毎年開かれる高知市文化祭に参加する定期演奏会は三十九回を重ね、高知県芸術祭の地方公演も七十九回となり、生の演奏に接する機会が少ない地域の人達にも歓迎されている。この他にも各種の公式行事での演奏や、県外各地へ出向いての親睦公演なども枚挙にいとまがない。

更に昭和五十年には、フレズノとロスアンゼルス、昭和五十三年にはケンタッキーからそれぞれ招聘されて渡米公演を行い、また、昭和五十五年には台湾で演奏会を開き、昭和五十八年にはミュンヘンのIGAに出演した。海外での演奏は、民間親善使節としての大任を果すことが出来るとともに、各地での合同演奏を通じて国境を越えた芸術の尊さに触れ、人間として最高の感動に浸ることが出来た。

フラワースングクラブは、アマチ

## 地域社会の振興のために

(財)高知地域経済振興財団

高知県の産業と文化の振興に役立つローカルの経済研究所をめざし、高知相互銀行が創立五十周年を記念して、昭和五十二年に設立した公益法人が高知地域経済振興財団です。活動内容は、地域経済の調査や科学研究の助成、経済図書の出刊、経済セミナーの開催のほか、地域に密着したテーマで毎年行う懸賞論文の募集などです。

出版では、高知県で最初の県下市町村別の民力研究をまとめた『高知県の民力』、主婦にもわかる経済解説書『みんなで知ろう高知県経済』をそれぞれ二千部つくり無償配布しました。後者は左ページに解説文、右ページにカラー図版を入れた読みやすい工夫の高知県の経済白書といえるもので、希望者が多く瞬時に無くなり、再版を検討しています。

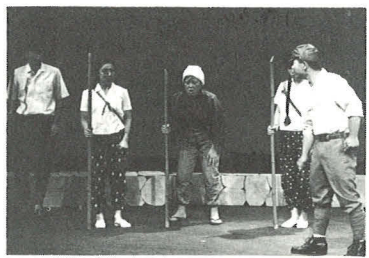
懸賞論文の募集は、地域振興のアイデアを、行政や専門家だけに頼るのではなく、広く民間から募るために行っています。各方面からの応募者が増えるにつれ、女性も散見されるようになりました。第一回の募集テーマは「高知県の産業振興」と



## 劇団ゆまにて

武市哲夫

振りかえれば足掛け十五年の歳月が流れていた。あつという間の十五年、気の遠くなる長さの十五年、ともに正解である。三十本近い作品を傍らに眺めて「あつ」と、気が遠くなるを同時に感じている。



「四万十川絶えむ日にこそ」から

「村山職業訓練所」から始まって、「ブラックコメディ」「熱海殺人事件」「野暮台国反乱」「泥棒たちの舞踏会」「嘘の母」「奇蹟の人」「桂浜殺人事件」「傘なんて大嫌いな」「四万十川絶えむ日にこそ」……ざつと拾ってこの通り、まるで五日焼飯である。芝居作りに節操がないと某氏にたたかれたこともある。「芝居なんてのは、あつちに祭りがあれば急いでかけつけ、お祭り男のすることですよ」とつかこうへいも私に言っている。まことにつかこうへいも私も思っている。あつちこつちと走り通した十五年であった。

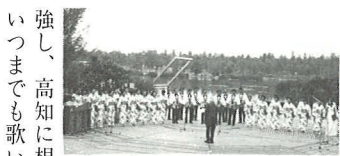
## 行政の文化化への一試行

高知市納税ポスター

文化を通じて行政を見直す動きが各自自治体で盛んになっています。この観点から、私どもが納税ポスターを作り始めては四年になります。このポスターは、納税の期限を知らせ、自主納付意識を高めるためのものですが、それ以上に市民の共感を得、心に訴えるもの、を指し取組んできました。毎年、市県民税、固定資産税の各納期ごとに八枚のポスターを一シリーズとして、計一万枚を制作しています。配布は市内が中心ですが、他市からの問い合わせもあり、行政がつくるこの種のポスターとしては街の情感を伝えるという評価もあり好評です。



今年は、シリーズの表現テーマを福祉、文化に求め、日頃市民の皆さんが感じていることや率直な声、願いを具体的な言葉と映像で描き、表現することを狙いました。高知市は総合計画に基づいて、明日の設計図とも言える「人間都市づくり」を二十一世紀の街づくりとして進めています。



野外公演

ユアの合唱団としては、その活動の特性と歴史の古さ、規模の大きさ等で、日本でも数少ないユニークな存在である。主宰者の高知大学名誉教授橋本憲佳を中心として、益々勉強し、高知に根を張る大樹となつて、いつまでも歌い続けてゆきたい。

連絡先 橋本憲佳方

電話 ②4 5505

(高知中冬子)

「家計支出からみた子女の教育費」の二題でした。第二回は「高知県の住宅問題」、第三回は「高知県の観光問題」、第四回は「高知県の特産品の振興策」、第五回は今年龍馬生誕百五十年にちなんで「産業振興をいかに人材養成の具体案」です。締め切りは九月下旬で目下受け付け中です。入賞論文は、毎回二千部印刷して県下に配布し、活用していただいています。

連絡先 (常務理事 大上力)

電話 ②2 9311 内線 251

財団事務局

## 風伯

ところで、この原宿風俗的なものがだんだん日本の現代風俗の中へ入り込もうとしている。都会においては、ほんのちよびりしたエイリアン風俗に過ぎないものが、地方へやってくる。近頃流行りの健康体操ともからみあって、一種の現代文化として受け入れられはじめている。文化というものは成熟し且つ未來的な展望を持ってこそ文化である。そこに伝統が生まれる。若者たちの破壊の試みもその伝統の中でこそ生かされる。かつて若年者は大人の指導によって文化に目覚めていったものだ。現代の大人では仕様がなっていない。若者たちが考えねばならぬ。せめて大人は、若者の無智なる文化に追いつかないで。

(旧人)

## 賑やかさのカケ

土佐が、最も土佐らしさを沸き立たせる夏も終わった。今年の夏は例年になく賑やかであった。恒例のよきこい祭りも、一万人を超す踊り子隊の参加で、ますます盛んになっていく。伝統の古さということでは、徳島の阿波踊りにはかなわないが、こちらの方がはるかに若い人たをひきつけるものをもっている。踊りやリズムにもそのことが現われており、新しいものが意欲的に加えられているのは、鮮度の高きとなつている。祭りといえ、どちらかという伝統の古さが尊ばれるのだが、よきこい祭りは時代感覚を敏感に取り入れているところがよい。回を重ねるごとに益々盛況になっていくことを願ってやまない。

市民の住みたいと思う街、いつでも住んでいたいと思う街、そんな街をつくるのです。このポスターで、市税が優れた福祉都市、文化都市、高知市を作るために役立っているという事を市民の皆さんに感じていただければ成功です。

連絡先 (高知市税務管理課広報担当)

電話 ②8 1111

内線 375

今年の夏を特色づけるもう一つのものに、坂本龍馬生誕百五十年がある。こちらの方は、卒直に言っているまいちといたところである。龍馬音楽祭、司馬遼太郎氏の講演会、龍馬展など、人もよく集まった企画もいろいろある。それなりに成功を収めているといえる。龍馬記念館建設募金も、十億円というどえらい目標をかかげて進みつつある。まだこれからいろいろつか行事が計画されている。なにも龍馬生誕百五十年が、県民全体のものとして盛り上がりにかけていることは否定できない。原因にはいろいろあるが、龍馬生誕百五十年の意義となにをどうすべきかの方法論が、ここにもも県民すべてのものになっていないように思う。なぜいま龍馬かについて、もつと県民のこころをゆさぶる必要がある。(亜)

あなたが残す郷土の記録 '85~'86

# 募集 第2回高知の映像コンテスト

※問い合わせ、作品送付は財団まで

カメラ、ビデオ機器の高性能化と著しい普及によって、誰もが美しい映像をものに出るようになってきました。そこで、幅広い年代層の皆さんが、日常生活で気づいた郷土を記録し表現するコンテストを開催します。豊かな表現と斬新な視点によって高知を写真し、多彩な郷土の記録をお寄せください。



「川辺」片岡良相  
第1回入選作品

テーマ 祭り／曜日  
／まちの景観、美  
観／河川／生活の  
中の文化／コミュ  
ニティ活動／高知  
の見どころ、旧跡

作品受け付け 昭和  
六一年一月六日(月)  
～昭和六一年一月  
二〇日(月)

＊郵送または持参で  
応募資格 制限あり

入選発表 昭和六一年二月上旬

### 〈写真の部〉

賞 入選(二〇点) 賞状と賞金一万円  
＊ネガを提出していただきます。  
応募規定 ①六ツ切りの作品に限る。  
(カラー、モノクロ、組写真)

- ②未発表の作品に限ります。ただし、同好グループや学校放送、自主発表会、地域の催し等との重複は問いません。応募作品は返却しません。(応募者には記念品を進呈)
- ③応募点数に制限はありません(組

写真の場合も一枚の作品が六ツ切りであること)  
(注)作品展示：応募作品を展示します。日時、会場未定。

### 〈ビデオの部〉

賞 優秀賞(一点) 賞状と賞金十万円  
佳作(五点) 賞状と賞金二万円

応募規定 ①ビデオ・カメラで撮影した作品、または八ミリ、十六ミリフィルムで記録したものをビデオに編集した作品。テープは二分の一インチVHS、ベータ、八ミリビデオ方式に限ります。  
②作品は三分以上、十五分以内にとめてください。  
③未発表の作品に限ります。ただし、同好グループや学校放送、自主発表会、地域の催し等との重複は問いません。

- ④応募作品は返却しません。(応募者には記念品を進呈)
  - ⑤応募点数に制限はありませんが、一作品一本のテープで応募してください。
- (注) 作品に他人の著作物を使用するとき、著作権法に注意してください。

### 技術的な相談

高知市民図書館視聴覚  
ライブラリーまで  
(電話22-8111  
内線284)

近日刊行/  
**高知県方言辞典**  
龍馬サンバ (楽譜・振付つき)  
レコード店で  
市内好評発売中

協賛者の募集  
個人、団体を問わず、このコンテストの趣旨に賛同し、ご支援、ご協力いただける方を募集します。財団ま

## 第2回高知市都市美デザイン賞

※資料請求、問い合わせは財団まで

優れた建築物と環境美化への市民の試みが、個性と風格のある街づくりに大きく貢献していることに着目し、その奨励と顕彰をはかるためこの賞を設けました。積極的なご推薦をお願いします。

対象 デザイン的に優れ、親しみ、やすらぎを感じさせ、周辺の景観づくりに好ましい影響を与え、都市美の向上に寄与するつぎの建築物や建造物で、昭和六十年一月一日～昭和六十年十二月三十一日までに高知市内でつくられたもので、つぎのいずれかに該当するもの。  
①新しい都市美創出のモデルとなるもの  
②壁画・彫刻・その他これに類するもので文化的、芸術的環境をつくりあげているもの  
③総合的に計画された建築群で良好な街並みの景観をつくり出しているもの

でご連絡ください。(ご芳名は後日発表します)  
備考 入選作品の著作権は主催者に属します。

### 第一回入賞

五台山ランドスケープ



場合がある  
ります。  
選考 県内  
および中  
央の都市  
計画、建  
築、文化等の各分野の専門家、学識  
経験者で構成する選考委員会で、厳  
正に選考します。

＊選考委員の氏名は公表しません。  
応募方法 自薦、他薦は問いませんが、つぎの書類の提出が必要です。

- ①高知市都市美デザイン賞推薦書(所定の様式による)
- ②推薦物件のわかるキャビネ・サイズ以上のカラー写真(2枚以上、位置をかえて撮影したもの)
- ③推薦物件の形態、構造のわかる平面図と立面図(青焼きのものでも可)

受付期間 昭和六一年一月六日(月)  
～昭和六一年一月二〇日(月)  
入賞発表 昭和六一年二月上旬

財団法人高知市文化振興事業団  
〒780 高知市本町五丁目一番三十号  
TEL (〇八六) 四三三六五  
郵便振替 徳島 814 869

### 推薦

④周辺地域のシンボルとなるもの  
建築物や建造物の範囲 ①住宅、店舗、工場、ビルなど一般建築物(公共建築も可) ②生け垣、並木、広場、庭園、公園など ③壁画、彫刻、門、モニュメントなど ④道路、橋など  
表彰 特賞 一点 入賞 二点  
＊発注者に表彰状と表彰銘板を、設計者に表彰状と副賞をおくりします。  
＊適当なものがなければ表彰しない